

連濁音の發生

山田 孝雄

論

説

(五五六)

我が國語の聲音上の一現象として、連濁音と稱するものあり。この連濁音と稱せらるゝものにつきて、聲音學上の解釋を下したるものをきかず。蓋これあらむ。然れども吾人、寡聞陋見、未之に接せざるなり。こゝに聊之を釋して世に問ふ。

連濁と稱するものは、本來清音なるものが、熟語をなす際に、濁音に化生するものにして、上に來る語との連聲上の便宜によりて、下なる語の首音に於いて、濁音の化生するをいふ。たとへば、

やまがは、 はしばし、 さとびと

論ず、 封ず、

の如きこれなり。この「が」「は」「び」「ず」等は、元來清音なるものなるが、かく熟語をなす際に、往々上の如く濁音をなすものなり。

余は主題に入らむとする前に、先濁音の觀念を明にし、ちかはずばあるべからず。抑濁音とは清音に對したる名にして、「が」「か」「に」對し、「さ」「の」「に」對するが如きをいふものなれども、古來の説明は正鵠を失したるものにして、頗奇怪なる説明に陥れるなり。かくて又余は濁音の説明の前に、聲音發生の状態を少しく説かざるべからず。

凡言語と稱せらるゝものは人間思想の發表なるからに、同時に聲音の手段をか  
らざるべからざるなり。この聲音と稱するものは、即、言語の形體にして、思想を表明  
する要具なりといへども、その制約は人體と氣流との二者に存す。この故に聲音を  
論ぜむには生理學と物理學との二方面の豫備的智識を要す。

すべての音響の發生が、空氣の振動なるが如く、人の音聲も亦空氣の振動により  
て生ず。吾人の呼吸機官なる肺臟氣管、喉頭腔、咽頭腔、鼻腔及これらに連れる口腔は  
皆聲音發生の爲には必要なる機關なり。而してこれら機關中最重大なる價值を聲  
音發生の上に有するものを聲帶とす。聲帶は喉頭に裝置せられたる膜様の彈力組  
織にして緊張弛緩開閉自在なる作用を有するものなり。

今こゝに肺より流出せる呼氣が、喉頭に來る際にあたりて聲帶の緊張ある時は、  
この緊張によりて二個の聲帶は著しく接近す。この際、氣流はこの間を通過せむと  
して、この薄膜の縁邊に振動を起す。これ恰、破窓を秋風の吹きて、音響の發するに似  
たり。かくの如くにして生じたるものは吾人の音聲の基本をなすものとす。

世に母音と稱するものは、この聲帶の緊張を通じて生ずる振動に外ならざるな  
り。かの「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」と稱するものも其の本一にして唯この聲帶の振動と同時  
に其の氣流が口腔其の他調聲部と稱せらるゝ部分の形に觸れて苦鳴する處の音  
を異にするが故に生ずる差にして、之を物理學上にていへば上音を異にせるが故

のみ。全然別種の音にあらざるなり。

母音は物理學的にいへば調音にして一定時間に一定の振動をなすものなり。かくてこの母音は之をながく繼續しても亦かはることなく發音しうるなり。古來「ひびき」といへるはこの現象をさせるなり。母音のこの現象は吾人のこの論に必要な點あるものなり。

母音がかく調音的なるに對して口腔其の他の支障によりて生ずる騒音的のものあり。又母音が聲帶の振動に基くものなるに對して聲帶の振動を伴はずして來れる氣流によりて口腔其の他の特別の支障に觸れて生ずる音あり。これらを總稱して今假に子音と稱す。

余はこゝに清音と濁音との對比にうつるべし。わが國音の上に於いて清濁二音の對比あるは、

カキクケコ

サシスセソ

タチツテト

ハヒフヘホ

ガギグゲゴ

ザズゼゾ

ダヂヅデド

バビブベボ

なり。この「サ」行「タ」行「ハ」行の清音につきて種々の異論あれど今之につきて論ぜず。

清音とはこの子音を發する時に聲帶の振動を有せずして、唯口腔の或部分の支障によりて生ずるものなり。しかるに、若この子音を發する裝置にふるゝ氣流が聲帶の振動をうけて來れるものなるときは、こゝに濁音といふ現象を生ず。實に清音

と濁音との差は唯聲帯の振動を起したる氣流によりて子音を生じたるか、また聲帯の緊張せざる所を通過し來れる氣流によりて生じたるかとの差にして其の他には決して差あらざるなり。この故に口腔部の同一の装置によりて或は清音或は濁音のいづれをも發しうるなり。

この故に濁音と清音との對比は聲帯振動を伴はずして發しうる子音のみに存し、元來聲帯振動を常に伴ふものにはこの對比なし、「チ」行、「マ」行、「ヤ」行、「ラ」行、「ワ」行等然り。但しこれらは今行はるゝ説に従ふのみ、吾人は別に意見あるなり。そは他日世に問ふべし。

こゝに吾人は母音の「ひゞき」を有するものなると濁音の聲帯振動を伴へる氣流によれる子音なることの二點に注意を加へおきて、次の要點にうつらむとす。わが國語の音的組織は一の單語として、かならず熟音組織なることは、既に世人の知れる處なり。熟音とは一の語音としてあらはるゝものが、母音なるか、又は子音と母音との熟合せるものを一單位として之を集合したるものをいふ。即我が子音は獨立的に自由に位置を擇びうるものにあらずして、一の子音は必一の母音が伴生するものなり。たとへば、英語の

god, dog, split.

の如きは上下に子音ありて中間に母音あり、而して子音は母音の上に来り、下に來

り、自由なるがうへに、一の子音の連なることあるものなれども、吾人の國語にはかゝることは存せざるなり。これらの英語を吾人の國音的に發音せしむるときは、

gōdo, dōgu, supīto.

の如くなるにて明なり。かくの如くにしてわが音は子母二音は必合一してあらはれ、子音の分裂を許さざると同時に、母音は必子音の次に來らざるべからず。かくの如くなればわが國語の音はいかなる場合も必母音を以て終るものなることは明なり。但し「ン」を以て終るものあり。これは別に論ずることあるべし。而してこれらは外來語の發音に用ゐると多し。

茲に至りて、余輩は連濁の聲音學上の説明をなしうる地位に來れり。

先見よ。連濁は意義上如何なる際に生ずるかといふに、必二語が熟して一の單體となる時に生ずるなり。

やはがは、すゞりばこ。

といへるを見よ。やまがはは、やまにある川にして、川の種類すゞりばこは、硯を入れる箱にして箱の一種にして共に一の語たるものなり。若之を

やま、かは、すゞりばこ。

といふ時は二者各分立して山と川、硯と箱との二觀念の重なれるのみにして一の觀念をあらはすものにあらざるなり。

しかれども、二語の合して一觀念をあらはす際には必連濁を生ずといふべきにあらず。たとへば

てがた(手形)      あきじひ(青盲)      をじか(牡鹿)

といへども、又、

いかた(鑄型)      めしひ(盲目)      さをしか(牡鹿)

の如く連濁を生ぜずしてしかも一熟語をなせるものもなきにあらず。

しかりといへども、この連濁をなすものは必熟語ならざるべからず。しかして熟語の發音法はこの連濁を生ずる豫備として注目すべきものなれば、聊之を説かむ先、吾人が一の單語なりと認むるものは、必聲音の上に於いても一の個體なることとの感を吾人に與ふるものなり。この個體感が如何にして吾人に與へらるゝかといふに實にその語の聲音と前後にある他の語の聲音との間に多少の間隔を有せるに、よるなり。即無聲の間隔を有するによりて吾人は前なる無聲域と後なる無聲域との間の一連續の音を以て一の單體と見なすなり。今この無聲域を○符にて示せば次の如き形となるなり。

○やま○かは○すゝり○はこ○

かくはいふものゝ、各熟音はなほその熟語としての個體なることは吾人が感じられるが如くなれば、この間にも亦單語としての間隔よりは小なりながらも間隔を

有するものなるは明なり。この間隔は・符にて示すべし。しかるときは次の如き形となるなり。

○やま○かは○すゞり○はこ○

然るにこれらが熟語となるときは上なる語と下なる語との間隔即單語としての間隔は撤去せられて單に音としての間隔即一單語内の熟音間の間隔に等しくなるなり。これを對比する時は左の如し。

○やま○かは○

○すゞり○はこ○

○て○かた○

○やまがは○

○すゞりばこ○

○てがた○

○あき○しひ○

○を○しか○

○い○かた○

○あき○じひ○

○を○じか○

○いかた○

○め○しひ○

○さを○しか○

○めしひ○

○さをしか○

かくの如く上の語と下の語との間は著しく接近せられざるべからず。若之を接近せしめざる時は決して熟語たることを吾人に感ぜしむることなし。

上に述ぶる如く熟語は二以上の單語を連ねて其の單語間の間隔を單語内の音と音との間隔の如くに發音するによりて生ずるものにして、形體上一連續をなせるものなることは實に熟語結成の形體上の唯一の條件にして、かくてこそ吾人に

一個體なる感を與ふるものなるなれ。

以上述べし所のものは、この連濁説明の條件として必要缺くべからざる事實のみなり。

國語の音組織の熟音なること(一)、母音が必下に來ること(二)、母音の調音にして「ひき」を有しうるものなること(三)、熟語の際には音の接近あること(四)、は皆連濁を生ぜしむべき豫備的地位をなせるものなり、而して母音は聲帶の振動なること(五)と濁音は聲帶の振動を伴ふ子音なること(六)とを思ひ浮べらるゝ讀者は最早多言を費さずとも連濁の性質をさとりたまへるならむ。

實に連濁なる現象は上の六個の條件によりて生じ來れるものなりとす。今こゝに熟語をなせる二單語ありとせよ、而して下なる單語の首音(一音語なる時はその音が濁音に對比せる清音なる時に、上なる單位の終の母音がこの清音と接近してその接近の度の頗密に、而してその母音の「ひき」がなほ存せるに直に子音の裝置をなして之を發せむとする時はこゝにその子音は上の母音の「ひき」の影響をうけて濁音に化するものなり、かゝる現象はすなはち連濁なりとす。今之を聲帶の狀態につきていはば、

やまがは、

の場合に於いて「ま」の母音「あ」の韻はなほ存してあり、即聲帶は緊張のまゝにて氣流



はこれに觸れて進み來り、而して「か」の子音の裝置に進入する時は直に「が」音を生ずるなり。この故に連濁といふ現象は聲帶緊張の持續によりて發生したる現象なりといふなり。吾人はかくの如くにして連濁音の發生を解し得たりと信ず。

世人は體詞に於ける連濁には注目すれども、用詞に於ける連濁には目を注かさざるものゝ如し。連濁の性質を知らむと欲せば、これにも注意せざるべからず。殊にこれらには興味ある事實を見るなり。これらは最多く動作性形式用詞「す」と其の客語殊に字音のものとの間に行はるゝものとす。たとへば、

議す、賞す。

の如きは「す」は清音なれども、

論ず、長ず、

に至れば、連濁を生ず。しかるに、

議論す、主張す。

といへば、再清音となる。これ奇なるが如くにして、しかも、連濁の消息はこのうちに秘せらる。

こゝに於いて吾人は「ひゞき」と母音の本體との區別をとかざるべからず。從來この二者の區別をとかずといへども、こゝは吾人の耳にも異なる感を與ふるものなり。たとへば、

(一) あ……………

(二) ああああ

(二)の初頭の「あ」と之を長呼したる「ひゞき」とは差あることは誰も感ずる處なるべし。

同(一)(二)を樂符をかりて示す時は、



これら(一)も(二)も時間に於いては同じとすへども、(一)は一音の「ひゞき」の二拍子間の連続にして、(二)は二分の一拍子の短音の四個の繼續なり。この際に於いて「ひゞき」と音との區別を明瞭に認めらるゝなり。かくてこの母音と「ひゞき」とは吾人に異なる感と與ふる如く、生理的物理的にも異なるものなり。即母音はその發生の初頭に聲帶を初めて振動せしむる一種の音覺を伴ふ「ひゞき」にはこのものなし。これその差なり。この「ひゞき」と母音とは全然同一のものにはあらぬを古來混じて母音を母韻などいへる者少からず。母音は必音と稱すべきものにして韻にあらざるなり。若韻といふ字を用ゐむとせば、そは「ひゞき」にあてざるべからず。さてかの論「長」の如きは「ひゞき」の長さ音なるなり。吾人の國語の「ン」は子音にあらず、母音にあらずして鼻的韻なり。かくてこれら鼻的韻あるもの又は長韻のものは、自然韻の勢のなほ存するを「ず」はその餘勢をうけて、上に説明せしが如き聲帶の状態によりて濁音となるなり。然るに「議論」「主張」の如き音なるときは上に來れる音との連續の爲に聲帶緊張持

續の力は費され、この「論」張の發音の終るや、直に一度聲帶を弛めて一刹那の休止ありて次の「す」にうつるが故に濁音は生ぜざるなり。これを以てもその聲帶緊張の如何に連濁を生ずるに力あるかを見るべきなり。今之を圖示する時は左の如し。

やまがは すゞりばこ、 てがた、 いかた  
 ぎす、 ろんず、 ぎろんず、

・符は音の間隔

—符は聲帶緊張の持續を示すもの。

以上に説明せし如くなれば、連濁は一面より見れば、音聲の同化作用に基けるものにして、面より見れば、勞力節減の結果なりと論結せざるを得ざるなり。

國學院雜誌第十卷第七

鼻音考正誤表

(頁)行	(誤)	(正)
二七、一〇	が行	加行
二七、一一	カヤカニカヨ	キヤキニキヨ
二七、一三	キミカヨ	キミカヨ
二八、一三	アツピケム	アツピケム
二八、一三	イナミツマ	イナミツマ
二八、一三	ミヌメ	ミヌメ

連濁音の發生